

アンソニー・ギデنزの行為理論・社会システム理論(三)
——政治の概念をめぐる——

岡田 宏太郎

目次

第一章 行為と言葉

一 はじめに——本稿の課題

二 客観主義的理論と言語「道具」論

三 主観主義的理論の検討

四 マルクスとギデنز(以上、一六五号)

第二章 記号と社会システム

一 行為の媒体としての言語

二 社会システムの構成と権力(以上、一六六号)

三 社会システムと「時空」

1 時空性の再考

- 2 社会システム理論の再考
- 3 近代の社会システム
- 4 近代的疎外と資本（以上、本号）
- 第三章 結論——「国家」と「政治」

第二章 記号と社会システム

三 社会システムと「時空」

1 時空性の再考

ここまでは社会システムの構成を記号の作用から理解してきた。この節では、同じことを時空の構成という観点を加味してみてみたい。ギデンズは、時空について、「ハイデガーの現前としての時空の概念と、資本主義の性格の焦点としての『労働時間』のマルクスの分析との間の親和性」(8a).. ∞ を指摘している。ここでは、この指摘の意味するところをたどりつつ、社会システムの時空的な構成について、ギデンズ自身が直接論じていない点にも踏み込んで明確化をはかりたい。さらに、このことを土台として、近代の社会システムの特徴を展開したい。

なお、以下では、「時空」の表象や名前には、例により「時空」というように括弧を付し、実践一般の時空性につ

いては括弧は付さない。まず、この時空と「時空」の問題についてのギデンズのパラドキシカルな諸命題——ギデンズは、一方で、時空を切れ目のない「持続」とし、他方で、「括弧にくぐられた」つまり分節化された「時空」について語る——を解きほぐすことからはじめよう。ここでは、さしあたり時間と時空（「時間」と「時空」）とを厳密に区別しない。実践は、時間的、空間的次元と不可分に生成し（前稿（二一〇—二二三頁）、空間と区別された時間というものは、根源的レベルでは、問題にならないからである。

(1) 「時空」の否定

時空を「容器」のようなものと考えた観点は、ギデンズによって拒否されていた（前稿（一九六、同（二三八頁）。区切られた「時空」の否定ないし相対化である。すなわち、「過去」、「現在」、「未来」などと区切ることで「時空」の観念は、人によってつけられた名前であり、実在するものではない（81a）：30,32）。名前としての「時空」は、一つの観念であり、非時空的なものである。すなわち、行為によって現象させられる「文脈」ないし「場」(locate)——これらは「時空」と同義——や、そのサブ・カテゴリーである「範域」(region) は、「一般的モデル」や「名前」同様、非時空的でヴァーチャルな、客観化された構造であり、観念である。

これに対し、実践Ⅱ存在の生成自体に、時空的性格がある。すなわち、実践とは、「持続的な流れ」であり（79）：55；60、（84）：3）、時空はこの実践そのものに内在している。時間は「現前すること」(presencing)であり（84）：45のハイデガーからの引用を参照）、「可能なものの生成」である（79）：4；四）。存在しているのは切れ目のない現前の流れであり、この存在Ⅱ実践自体が時空的なのである。存在の生成が、時空の生成である。この生成が構造化にはかならない（*ibid.*）。このように、ギデンズは、「容器」としての「時空」を否定し、実践の生成、つまり構造化の問題として時空の問題を把握しなす。⁽¹⁾

実践の時空性は前稿の中心的論点であった（特に、前稿（一）二一九—二二二頁）。なお、実践イコール時空であるのに加え、実践イコール存在イコール意味であり（前稿（一）二二二頁）、さらに、マルクスの価値も、これらと同じレベルの概念である（第一章、一、1の（2））。意味や実践は、主体に即したとらえ方に、他方、存在や時空は、客体に即したとらえ方になるが、これらはすべて同じものであり、「どうにも把握のしようのないもの」（マルクス）である。

（2）「時空」の分節化

ところで、実践において「一般的モデル」を措定することは、石Aのみではなしえず、石Bをそれに関係づけた時にはじめて可能となっていた。この時、石Aを使ったことが、「未来」を展望しつつ「過去」の知識として想起されていることに注意しよう。つまり、知識の使用は、「未来」に向けて「過去」の経験を構成していくことである。もし、石Bをみた時、「一般的モデル」が措定されなければ、石Aについての過去の実践は、たとえ石Aを使用したという物理的事実が変わりなくとも、実践的知識の使用としての人間の実践とはいえなくなる——時空的な社会システムを構成する実践ではなくなる。「一般的モデル」が措定されなければ、過去は「過去」として形成されないし、したがって、「未来」ということも成立しない。「過去」や「未来」という「時空」の——より正確には「時間」の——分節化と、「一般的モデル」の成立とは、不可分に結びついている。なお、ギデンズ自身は、「時空」を分節化することを、「時空」を「結びつける」(bind)作用、あるいは「括弧にくくる」(bracket)作用とよんでいた（本章、二の1）。ここで、「時間」の観念に直接かわらないようにみえる石という「一般的モデル」でも、区切られた「時間」の観念を形成していることに注意しよう。すなわち、石Bをみて、これも以前の石Aと同様に使えらる実践的に判断することには、「過去」という観念がはらまれており、ここに「時間」の観念が萌芽的に成立している。「時間」は、石Aに関するそのように「過去」のものである場合もあるが、商品Aは、商品Bより以前に生産されたものだ

は限らない。商品Aと商品Bは同時に生産されてもよいし、人は「未来」に生産される商品に対して支払うこともできる。つまり、「一般的モデル」は、あらゆる実践を結合すると同時に分節化し、「時間」観念を成立させる。あらゆる記号、「一般的モデル」の成立が、「時間」の分節化・接合を含意しているのである。このことは、記号なし「一般的モデル」と、「時間」とは、同義とまではいえずとも、両者の成立は同時的であり、いわば同値であることを示している。

「空間」についても同じことがいえる。例えば、等価形態や貨幣の成立により、商品Aの生産と商品Bの生産という実践が「時空」的に分節化・接合され、商品を生産する「仕事場」という表象が可能になる。勿論、貨幣の物質的担い手(金属や紙)⁽²⁾と、商品を生産する場所は、物質的に別物であり、貨幣と「仕事場」という言葉は互換可能ではない。しかし、貨幣ないし等価形態の観念なしに、商品を生産する「仕事場」は観念できず、逆に、「仕事場」が観念される時、貨幣や等価形態は、直接に観念されずとも、間接に観念されているも同然である。このような意味で、「空間」は、やはり「一般的モデル」や記号と、相互の別名としての側面を有し、いわば同値である。

以上のように、「一般的モデル」や記号と、「時空」の成立は同値である。したがって、「時空」という括弧つきの表記も、他の観念を括弧つきで表記して区別するのとまったく同じ意義をもつ。すなわち、本稿のはじめで区別しておいた、観念と実践、言説と行為等の二分法と同じ意義を有する。この二分法が本稿の基本的観点に関わっていることは、繰り返すまでもない。

なお、先に「時空」には「時間」と「空間」の区別はないとし、ここでは、「一般的モデル」の成立による「時間」や「空間」観念の萌芽の成立について述べた。これらの説明は、同じ根源的レベルについての説明であり、別のことといっているのではない。この違いは、説明の必要上、「学問」的観察者の視点が導入されることによる。原初的行

為主体にとり、石を対象化した「時間」と「空間」は不可分であるが、これを説明するわれわれは、「過去」や「未来」という「時間」や、「仕事場」等の「空間」に言及せざるを得ない——これは本節の重要な論点に連なっていく。

(3) 時空と「時空」の自己言及性

記号は実践によって外界に投影されているが、記号が指定されなければ実践は成立しない。構造化は、言葉で説明しようとするれば、このような循環に陥る自己言及性を有していた。そこで、記号と「時空」とが同値であり、かつ、実践の生成イコール時空の生成であるとすれば、時空と「時空」についても同様の自己言及性が成立しているといえる。すなわち、時空の実践から分節化された「時空」観念が成立する一方、分節化された「時空」を前提にしているかのようにして、時空の実践は生成する。すなわち、時空と「時空」も自己言及的な関係にあるのである。⁽¹³⁾ 容器としての「時空」が否定されるといっても時空は「時空」なしに成立しない。しかし、他方で、「時空」は、時空を土台として成立する。この時空と「時空」の自己言及性は、既述の、実践と「一般的モデル」の主客の要素の自己言及性とまったく同一であり、その言い換えに他ならない。ギデンスは、ハイデガーの言明——存在は時間の原基的地平を通じてのみ再発見され、主客の両方はこの時間の原基的地平によって時間のなかに存在する (82a: 31)——を、以上のような時空と「時空」の、すなわち、主客の要素の自己言及的生成を指摘したものと解釈していると考えられる。

(4) 「時空」と物神性

前稿では、実践は時空的であるために行為主体は自己明証たり得ないと論じた (前稿 (二) 三三七頁)。ここまでの時空と「時空」についての考察により、この実践の非自己明証性をより正確に理解できる。

記号は物神的である。したがって、記号と「時空」が同値なら、「時空」も物神的である。物神性とは、記号が所

与であるかの如く現れることであつた。これを、「時空」に即して循環論法的に表現すれば、一方で「時空」は所与のように現象するが、他方、時空の方が「時空」が所与であるということを成立可能にしている、といえる。行為主体の時空的実践が能動的に現象させているのが「時空」であるが、「時空」は、行為主体により、むしろ受動的に体験され、行為主体を規定するかの如く現れている。ここには行為主体の錯誤がある。すなわち、行為主体は「時空」を自ら措定しておきながら、その措定したことを、忘却している——ここで、実践の時空性は、忘却ないし錯誤の発生する余地ないし暇を与えている恰好になっている。実践は、この錯誤の成立する余地ないし暇を——時空性を——もつことによってのみ成立するのである。このように、錯誤と時空性は一体であり、時空的実践は、錯誤を含み、物神的なるものを産出せざるを得ない。換言すれば、行為主体は非自己明証たらざるを得ない。実践が時空的であることと、行為主体が自己明証たり得ないことは、一方が他方の「原因」や「結果」であるのではなく、自己言及性のメカニズムにおいて一体である⁽⁴⁾。

本稿では、これから、この非自己明証性のメカニズムが、「時空」観念の強化と変容により、どのように展開していくのかをみていくことになる。

2 社会システム理論の再考

(1) 錯誤の変容

根源的レベルの記号は、記号イコール実践と記号ノン・イコール実践の両要素を同時にもち、第二段階と比べて記号の制度的成立は不安定であつた。このため、「時空」的に不在の行為主体との相互行為は限定され、社会システムのひろがりには「現前利用可能性」の高い範囲にはぼ限られた。第二段階では、記号の自立化により、「不在」の実

実践の間の相互作用が促進される一方、実践の自己言及的メカニズムは見えにくくなった（本章、一の2）。ここに、自立化した記号のトリックがある。

この事態は、行為主体の非自己明証性の、次のような変化に対応している。原初の記号成立において、自己明証でないことは、記号と実践の自己言及的連関——記号イコール実践と記号ノン・イコール実践の同時成立——に現れていた。これに対し、第二段階では、この同時成立が見えにくくなり、統一されていた記号イコール実践と記号ノン・イコール実践との対立が、「時空」的に分離して現象することになる。すなわち、遠隔化の視点で分節化された「時空」では、「記号イコール実践」という表象が成立しているとすれば、他方、記号を相対化する範域化の視点で分節化された「時空」では、「記号ノン・イコール実践」という表象が成立する。以下では、この括弧付きの「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」という表象と、括弧のない、記号イコール実践と記号ノン・イコール実践とを区別する。

第二段階の「時空」の分離は、「学問」的営みにおいて二元論の問題を引き起こすだけではなく、実践一般に伴うものである。例えば、ある「役割」を演じる「表」の「時空」と、それとは「矛盾」する別の「役割」を演じる「裏」の「時空」とが、「時空」的に分離して表象される。先のイギリス労働者階級の場合、雇用主側の論理にしたがっている「時空」——階級構造についての客観主義的分析の言説があたりまわりやすい「時空」——と、むしろこのような階級構造に対して否定的な態度をとっている労働者の文化圏という「時空」とが、分離して表象される。ここで、イコールとノン・イコールという矛盾する要素は、「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」との「時空」の分化により、別々の「時空」に配され、「同時」ではないものとして現象する。すなわち、矛盾は「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」として表面化しているにもかかわらず、対立する記号の解釈は「時空」別に

整理されて表象され、受け入れられている。「表」と「裏」について、「表」ではこのようにするものであり、他方「裏」ではあのようにするものである、と区別をつけて表象されれば、両者は問題ないものとして受け入れられるのである。行為主体が記号に否定的立場をとることも(「記号ノン・イコール実践」、「時空」の分化に組み入れられる。「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」の対立は、「時空」の分化によりパターン化し、そういうものとして受け入れられているのである。

この分化により、根源的レベルでの同時成立という不安定性は、観点の相違、ないしは、特定の「時空」と「時空」の間の「矛盾」(ここからは、根源的な主客の矛盾に対し、この表象としての「矛盾」にも括弧をつけ区別しておこう)として整理されて表象され、「安定化」させられている。根源的レベルの事態のあやうさ——イコールとノン・イコールの同時成立ないし自己言及性——に対し、主客の各要素を特定の「時空」に属するものとして区別し整理して表現すると、自己言及性は分かりにくくなり、「時空」に依拠しての記号をめぐる解釈の対立として、事態がなんら疑問を提起するものではないもののように見えてくる。これにより、遠隔化・領域化、すなわち「時空」の分化をとまなう社会システムが構成される。これが第二段階の「時空」をめぐる自己疎外の形態である。

(2) 実存的矛盾と構造的矛盾

原初に人間が「知の木の実」を食べたことは、楽園から人間が追放されたことを意味し、その時以来、人間は労働しなければならなくなった。これは、既述のようにアウストラロピテクスが知識を実践的に発動させることとして理解できる。原初、実践的に知識を使用する時、他の動物とは区別される人間が誕生する。それまで人間は、他の生物同様、自然の一部であり、無限の存在の生成の一部であったが、知識をもって自然と直面する時、人間は、自然の中に抱かれている状態から引き離されたのである。労働とは、この自然の対象化＝実践のひとつに他ならない。

こうして、有限な「現存在」としての人間（ハイデガー）は成立する（cf. [81a]: 236, [79]: 161; 一七七）。われわれは、ここまで、この「現存在」の成立——「楽園追放」のメカニズム——を、自己言及性として理解してきた。ギデンスは、この自己言及性Ⅱ自然の対象化の含意する主客の根源的矛盾を、「実存的矛盾」（existential contradiction）という。実存的矛盾は、主客の根源的対立であるから、「その性格上、すべてのタイプの社会において常に基本的なものである」（[81a]: 237）。⁽⁵⁾

この実存的矛盾に対し、「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」の「矛盾」は、ギデンスのいう「構造的矛盾」（structural contradiction）に当たる（cf. [79]: 161; 一七七, [81a]: 237）。すなわち、構造的矛盾とは、実存的矛盾が「矛盾」に転化したものである。「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」は、観念であるから、この両者からなる「矛盾」も勿論観念である。結局、「記号イコール実践」、「記号ノン・イコール実践」、「矛盾」は、観念として一体である。観念としての構造的矛盾とは、観念自体が「矛盾」の焦点となつてゐること示す用語に他ならない。観念は、常に「矛盾」であり、「矛盾」の焦点Ⅱ「矛盾」の運動する形態」なのである。ギデンスは、これを「フォルト・ライン」（fault-line）ともいう（[81a]: 237）。貨幣は、まさにこのような「フォルト・ライン」のひとつである。「フォルト・ライン」としての貨幣は、「対立」のみならず「共同」として観念される実践の焦点でもある。「フォルト・ライン」は、様々に解釈されることにより、逆説的事態を併存させていくのである。⁽⁶⁾

社会システムにおける「対立」や「共同」の土台には、自然の対象化Ⅱ実存的矛盾がある。逆にいえば、行為主体は、「矛盾」や、それを焦点とする「対立」と「共同」を形成しつつ、自然を対象化（労働）している。ここでの自然の対象化とは、労働のみならず、労働も含む実践一般を意味する。前述の石の対象化は、商品の対象化とは異なり、労働とは呼び難いが、これも自然の対象化Ⅱ実践である。石の対象化は、労働や「道具をつくる」ことで

はないが、「意味をつくる」こととして理解できる。ギデンズは、「意味をつくる」ことに人間の実践の成立を見いだすのである(行為論イコール意味論。なお、[8a]:155-156)。ギデンズの「史的唯物論」批判のポイントのひとつは、マルクスが労働や生産の説明において実質的に使用している「構造の二重性」の視点を、すべての実践Ⅱ意味の生成の説明として一般化していくことに他ならない。実存的矛盾という用語も、意味の生成という観点の重視を示している。

(3)「進化主義」

ところで、ギデンズの実存的矛盾と構造的矛盾の記述には、一見、首尾一貫しない点が存在する。すなわち、ギデンズは、構造的矛盾の成立を古代国家の成立——記号成立の第二段階——に対応させている一方で([8a]:237)、実存的矛盾は、常に構造的矛盾として現れるように論じ、両矛盾の同時成立を示唆する([79]:161;177)。この齟齬には、「学問」的観察者の視点の問題性——言説化自体に内在する問題性——が関係している。既述のように、行為主体にとっては、遠隔化・範域化による古代国家の成立をみるのは第二段階であり、ここで構造的矛盾が成立する。しかし、自立化した記号を既に有する「学問」的観察者の視点では、構造的矛盾——「記号イコール実践」と「記号ノン・イコール実践」——は、原初的な記号の成立時に既に見いだされている。というのは、「学問」的観察者が、原初的なイコールとノン・イコールを、認識のために言説化すれば、それがどれほど原初的な記号についてであろうと、「イコール」と「ノン・イコール」になってしまう。すなわち、どのような実存的矛盾も構造的矛盾のように現象してしまうのである。

また、ギデンズは、言語を習得していない幼児は、反照的モニタリングすなわち構造化を行い得ないという一方で([76]:116;167)、幼児の心理学的発達過程に時空の遠隔化を見い出している([90a]:97;111)。さらに、

人間以外の動物も、「時空」を分節化・接合すると考えられる場合——動物も「学習」して「過去」の経験を「未来」の行動に結びつけ、生かしている」と解釈できる——は無数にある。このような「学習」は、「発達」した視点からは「時空」の形成に見えてしまう（ただし、これが可能なのは、他の動物が、原初的、萌芽的な「時空」を、実践的には知っているといえるからである）。

ここに、今ひとつの言説化のトリック——「進化主義」(evolutionism)⁽⁷⁾が顔をのぞかせている。根源的レベルにおけるイコールとノン・イコールの同時成立は、言説を有した視点からは、「イコール」と「ノン・イコール」を、萌芽的に内在させているように現れる。すなわち、「発展」した段階からみると、「未発展」の段階が「発展」した段階を内に含み、準備しているかの如くに現れる。これらは、自立化した記号をもつ視点からの解釈自体から、実践の段階的、法則的な発展を含意する「進化主義」が現象してしまうことを示している。しかし、勿論、社会システムは必ずしも「学問」的観察者の図式通りに発展するわけではない。発展が現実のものとなるか否かは、「実践的問題」である（マルクス）。

前節では、「学問」的観察者と日常的行為者の自己疎外の同一性を論じたが、「進化主義」に関しては、「学問」的観察者の自己疎外の特異性——実践一般は解釈＝理解であるが（第一章、三の3）これとは異なる言説的な解釈の特異性——が問題となる。このため、ここまで同一物として扱ってきた、認識、観念、記号、言説等の中の、実践一般に伴い成立する「一般的モデル」（等価形態にあたる）と、言説や書字（貨幣にあたる）との区別に注意が必要になる。後者の特異性は、「一般的モデル」を、さらに言説化するという再解釈を含む点にある。すなわち、客観化された構造をさらに解釈し言説化するのが「学問」実践の特徴なのである。ギデンズは、この解釈の解釈——客観化の客観化——を、「二重の解釈学」という。⁽⁸⁾この「二重の解釈学」としての「学問」実践が、「進化主義」の問

題を産出するのである。行為主体が、遠隔化・範域化(「イコール」と「ノン・イコール」)を産出するのは自己疎外の一形態であるが、それをさらに解釈し認識することにより「進化主義」が現れる。この後者の解釈でも、解釈して産出した言説を、所与の如く現象させ実体化するという自己疎外は含まれている。すなわち、「進化主義」は、産出した言説と実践を同一視し、必然的「進化」の図式を作ってしまう。これは単純に言えば、言説を所与のように扱うという、単なる「構造の二重性」の効果である。しかし、より厳密に考察すれば、解釈を解釈する「学問」的实践は、「構造の二重性」により自己疎外されたものを再度解釈することで、さらなる「構造の二重性」による自己疎外を被っているのである。⁽⁹⁾

(4) 記号自立化の諸段階と社会システム

遠隔化・範域化の発生により、「学問」的観察者はこの段階の変容を「進化」として認識し得る。ただし、第二段階の行為主体自身は「進化主義」的理論をもたない。行為主体と「学問」的観察者の視点が同一化し、「進化主義」が現実化するのには、記号成立の第三段階——これが近代にあたる——である。次の3では、この点の明確化を通じ、近代的社会システムの特徴をみていく。しかしその前に、記号自立化の段階的進捗と「学問」的実践の特徴を理解し易い形にしつつ、前稿以来論じてきたギデンズ構造化理論、社会システム理論の骨格を示しておこう。

記号自立化の進展は、図1の矢印の示す方向で示される。図1の①において、行為主

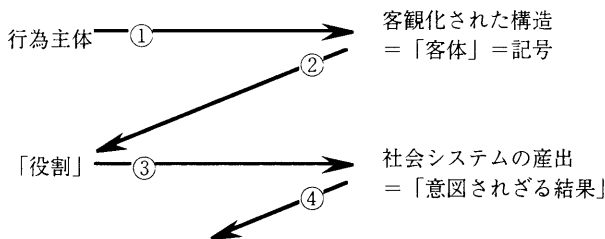


図1

（体は実践的知識を外界へと投影し、客観化された構造が現象する（実践的知識Ⅱ構造を投影することが構造化であり、実践の媒体となる実践的知識Ⅱ構造が、客観化された構造としても現れることが「構造の二重性」である）。②において、客観化された構造は行為主体を規定するように現象する。これは「役割」の形成でもある。「役割」とは、行為主体に明確に認識され、ある程度の期間持続すると観念される「役割」から、行為主体に明確に認識されず、一瞬のうちに変化すると考えられる「役割」——例えばアウストラロピテクスの、石を対象化するという「役割」——も含む。③において、行為主体はこの「役割」を果たし社会システムを産出する。これは、前稿で論じた「意図されざる結果」の産出でもある（前稿〔二三五—三三八頁〕。①～④の諸契機は同時的であり、全ての実践に含まれる。

図2はギデنز自身による（(79):117:一二九）。二つの図は、実質的に同じことを示している。図2の規則・資源とは、行為主体に身体化された実践的知識Ⅱ構造である（前稿（一二五—一二九頁）。図1の①～④の諸契機の同時的作用は、図2では、円環を成す三つの矢印が、実践において一斉に両方向に振動することに相当する。

実践の矛盾的性格を見落とし、自己明証な行為主体を想定すれば、客観化された構造の産出と「意図されざる結果」の産出の区別や、①と③の区別は無視される。すなわち、①を没却し③の「役割」を果たすことによる社会システムの構成のみをみれば、機能主義的な社会システム像⁽¹¹⁾が得られ、他方、③を没却し①の世界に焦点を合わせれば、現象学的な明証性は得られても、客観的な世界の構成は視野から外れる（第一章、三の2）。ギデنزの行為理論、社会シ

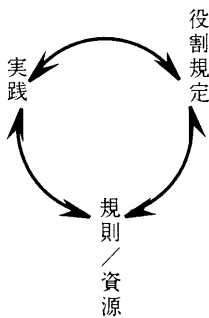


図2

ステム理論の核心は、これらの客観主義的、主観主義的陥穽を避け、①～④の諸契機の違いを堅持する点にある。

第二段階で、行為主体の②の意識化の強化、すなわち「客体」の意識の強化により、「役割」観念——既に論じたように「時空」観念としても同様——が強化され、遠隔化・範域化が発生する。これは部族社会から古代都市国家が成立することに対応した。ギデンズは、この古代国家の成立から絶対主義国家までの非近代の社会システムを、一括し「階級分割社会」(class-divided society)とする([81a]: 7, 108, 186, [85a]: 93)。絶対主義国家までを一括するのは、ギデンズが、記号の自立化の様相を社会システムの分類のメルクマールにするからである。ところで、ギデンズは、遠隔化の発生を、サーベイランス(監視)の成立ともいう([81a]: 5, 169, [85a]: 14-15)。実践は一般に権力的であるが、権力行使の資源である情報を蓄蔵する「容器」(本章、二の2参照)をとまなう実践について、その権力的性格を強調し、この用語が用いられる。古代国家と絶対主義国家とは、このサーベイランス実践の様相はかなり異なると考えられるが、両者は、基本的に②の意識化の段階に属する。というのは、サーベイランスの様相が質的に変化したというには③の意識化が必要であり、これはもう近代(次に論じる第三段階)の特質なのである。①～④の契機はあらゆる実践に含まれ、この意味でいかなる行為主体もこれらの諸契機を実践的に知っているが、原初の行為主体はこれらを明確に弁別していない。第二段階、第三段階として画される記号の自立化の進展とは、行為主体が②、③の各契機を弁別、自覚化し、それにより実践の様相が変容することに他ならない。

3 近代の社会システム⁽¹³⁾

(1) 「能動性」の成立

第二段階で、②の意識化とその作用の顕在化が進む。すなわち、「客体」の意識化が進み、遠隔化・範域化が発生

するのである。ここでは、行為主体の記号への反応が肯定的（「イコール」）であれ、否定的（「ノン・イコール」）であれ、「客体」の作用は、実践のパターン化、「役割」のクラスター化に止まりがちである。これに対し、③の意識化とは、「客体」に能動的に向き合う行為主体の主体性の意識化——意識化だから括弧を付せば、「能動的」に向き合う「主体」の意識化——を意味する。これにより行為主体は、「能動的」に「役割」を果たし社会システムを構成する自覚をもつ。¹⁴

全て行為主体は、実践的には、②と③の両契機を知っていた。これに対し、②と③とを明確に弁別し、社会システムを「主体」と「客体」の相互作用として観念するのは、近代の「社会学者」である。第二段階での②の意識化により、行為主体——あえていえば日常的行為主体（lay actor）——は「学問」的観察者に一步接近した。第三段階で、さらに③が認識され、日常的行為主体と「学問」的観察者の視点とが同一化する。すなわち、日常的行為主体が「社会学者」となる。ギデنزによれば、これこそ近代の特質である。「近代は、それ自体、徹底的かつ本質的に社会学的事象である」（90a: 43: 六一）。いまや行為主体は、「主体」↓「客体」↓「主体」↓…という相互作用の観念を得る。この「社会学者」＝行為主体の認識（つまり「社会学」）は、第三段階の社会システムの上部構造を成し、これが実践へと反作用し反省的自己規制が行われる。

ただし、既述のように、もともと日常的行為主体と「学問」的観察者の区別は不可能である。あえて違いを言えば、第二段階の日常的行為主体は、実践の本体である①の契機が強く、③の契機が弱いのに対し、これを観察している「学問」的観察者は、「見ているだけ」だから①は弱く、③の契機が強い。③の契機が強いとは、「学問」的観察者は、観察されている行為主体が「役割」を演じている、という認識を有する——換言すれば、「役割」が社会システムを構成するという客観主義的認識を有する——ということである。行為主体の「社会学者」化とは、以上

の、強い①と、強い③の契機（これらはもともと実践に内在していたのだが）を、併せもつことに他ならない。

行為主体の「社会学者」化は、行為主体が「進化主義」を身につけることを意味する。ギデンズは、近代における社会変動の促進を、「歴史性」の意識——「進歩的運動」の意識——の成立と関係づけていた（前稿（一）一九一頁、[79]: 199-200: 111-112）。「歴史性」の意識では、「過去」は「未来」に向けて意識的に相対化され、「主体」↓「客体」↓「主体」↓…という観念と結合している。反省的自己規制を引き起こす「歴史性」の意識とは、行為主体が獲得した「進化主義」だったのである。

(2) 自己疎外の二重化

ここで、「社会学者」化した行為主体の①と③は、「二重の解釈学」の二つの契機を成していることに注意しよう。①は第一の解釈であり、③はその再解釈である。⁽¹⁵⁾近代では、行為主体が、強い①と③の契機を併せもつため、後者の再解釈が前者の変容に直結し、「二重の解釈学」が反省的自己規制を引き起こす。しかし逆説的にも、③の「能動性」観念により、①の能動性は「社会学」の認識の視野からかえって没却されてしまう。「社会学者」化した行為主体は、単なる「学問」的観察者よりも強い①の契機をもつにもかかわらず、疑似的観念の獲得により、認識的にはかえって①の契機を見失うのである。これは、自己疎外の強化を意味する。

強い①と③の契機を併せもつことは、行為主体が二重に疎外された意識をもち、かつ、それにより実践が変容することを意味している。言説化自体に内在する「進化主義」は、既に第二段階ではらまれていた。近代とは、第二段階ではらまれた、この二重の自己疎外を実践的に展開する時代に他ならない。すなわち、「イコール」と「ノン・イコール」の対立は、既に、客観化の客観化——二重の自己疎外——を内在させていたが、第三段階では、二つ目の客観化Ⅱ「能動的」なとらえ直しの契機が、実践的変容として作用する。すなわち、二重の自己疎外の作用が実

実践的に明確化するのである。ギデンズは、物神性と物象性と言説化の有無により区別し、言説化をともなう場合を物象的としたが(84:180)、物象化は、単なる物神化の強化ではなく、二重の物神化であり、二重の自己疎外の産物である。この物象化の問題性が実践的に明らかになるのが近代なのである。

近代では、「社会学者」化した行為主体と同様、職業的「社会学者」の「学問」の実践も二重に疎外される。「客体」を現象させる能動性は一般に没却されるが、第三段階では、「能動性」観念によりさらに能動性に覆いが掛けられる。すなわち、疑似的観念の成立により、能動性は二重に覆い隠されている。この二重の疎外を含む「能動性」が、「社会学者」化した行為主体においては「歴史性」の意識として現れ、職業的「社会学者」においては「進化主義」として現れるのである。

(3) 「時空」から「時間」・「空間」へ

二重の疎外の展開する第三段階では、「時空」観念も変容する。ギデンズは、この変容を、分離した「時間」と「空間」の観念の成立としてとらえる。「空間」と分離した「時間」は、「客観化された時間」(objectified time)とよばれ(81a:9, 118, 131, 134)、また、分離した「時間」、「空間」は、それぞれ「空っぽの時間」(empty time)、「空っぽの空間」(empty space)ともよばれる(90a:17-19; 三三—三五、[9]:16)。これらは、等間隔の目盛りや座標で区切られた領域、すなわち、区切られた「空っぽ」の領域として観念できる。

分離した「時間」・「空間」観念の成立は、機械仕掛けの時計の普及により可能となった。それ以前は、空間的な標識への言及なしには時間の経過の判断は不可能であった。「いつ」は「どこ」(あるいは規則的な自然の事象)と不可分であり([90a]:17; 三三、[9]:16)、実践は、具体的、物理的な特質をともなう「時空」と強く結びついて形成された。ギデンズは、「時空」と実践とが結合したこの状態を、実践の「時空」への「はめ込み」(embed)と

う。機械仕掛けの時計の普及は、この「はめ込み」の状態を破壊し、実践を「時間」・「空間」概念で分節化・接合すること——「時空」の無限のひろがりの中で再構築すること（ギデンズにより「脱はめ込み」(disenbed)といわれる）——を可能にする（(90a): 21; 三五—三六、[91]: 2）。いまや、実践は、無限に延長可能で、いかなる障壁にも浸透し得る等間隔の目盛りや座標により、整序されていくのである。ただし、構造化理論では「時空」と実践とは不可分であるから、「脱はめ込み」とは、実践と「時空」が無関係になるということではなく、実践を物理的な現前を超えた「時空」に位置づけ直すことに他ならない。

ここで、分離した「時間」・「空間」概念は、「時空」を言説化し、認識すること自体に内在していたことを想起しよう（1の(2)）。根源的レベルでは、「時間」・「空間」は「時空」として一体であった。しかし、これを説明した時、われわれは、「過去」や「未来」という「時間」的言説や、「仕事場」という「空間」的言説を用いざるを得なかった。根源的には「時空」は一体であるが、「時空」を説明し、言説化すると、「時間」と「空間」は分離してしまうのである。すなわち、「時空」の客観化(①)に「学問」的実践の客観化(③)が加わり、分離した「時間」・「空間」観念が現れる。近代に展開する問題性は、やはり、客観化の客観化——解釈の解釈——つまり、言説化自体にはらまれていたのである⁽⁹⁶⁾。

ギデンズは、近代を、次の三点——「時間」と「空間」の分離、実践の「時空」への「はめ込み」の破壊、さらに、制度化された反省的自己規制——により特徴づける。言説化は、近代以前にも反省的自己規制を発生させ得るが、これに対する近代の特質とは、反省的自己規制が、制度化されることにある（(90a): 17-45; 三三—六三、[91]: 20）。これは、反省的自己規制による実践の変容自体が実践のパターンになることであり、本稿の用語では、行為主体が強い①と③の契機を一身に担うことに他ならない。ギデンズのいう近代の三つの特徴は一体である——反省的

自己規制を引き起こす「能動性」と、分離した「時間」観念との結合は明白である。この一体性は、行為主体自身が「社会学者」となり、二重の自己疎外の展開を体现することに存する。⁽¹⁷⁾これが、第三段階の自己疎外である。

分離した「空っぽの時間」と「空っぽの空間」は、古典力学が想定する「時空」観でもあるが、現代物理学にとつて、このような理解はもはや絶対的なものではない。ここまでの考察は、社会科学においても、分離した「空っぽの時間」と「空っぽの空間」を、自己疎外的で時代的な制約のある観念として相対化する必要を示唆している。

(4) 抽象化された記号

ところで、ギデンズは、第三段階の記号の体系を、「抽象的システム」(abstract system)と呼ぶ。「抽象的システム」は、貨幣に代表される「象徴的通標」(symbolic token)と「専門家システム」(expert system)から構成される⁽¹⁸⁾ ([90a]: 22-29, 80; 三六—四四、一〇一、[91]: 18)。勿論貨幣は記号であるが、あらゆる種類の科学技術の成果や職業上の専門的知識の体系としての「専門家システム」([90a]: 27; 四二、[91]: 243)も、言説的に構成される記号の体系であり、「時空」を分節化・接合する。大澤真幸氏は、第三段階の記号を「抽象身体」と呼び、次のように説明する。「非具象的なこの身体は、いかなる特殊な場所にも局在しないことによって、かえって宇宙の内部に偏在するものとして構成される」。「いまや、第三者の審級は、自らが不可視化することによって、逆に自らにとっての可視性の領域を極大化するのである」。⁽¹⁹⁾「抽象身体」が「いかなる特殊な場所にも局在しない」とは、ギデンズのいう「脱はめこみ」の効果であり、「不可視化」されているとは、そのヴァーチャルな性格を示す。

「時空」の無限のひろがりでの「能動的」実践とは、逆にいえば、何時何処にいようが、行為主体が「脱はめ込み」をとげた記号に付きまといられることを意味する。第二段階では、記号は物質的基盤の獲得により実践を強く規定したのであるに對し、第三段階では、記号が物質的基盤から遊離することにより、かえって実践をより強く規定するのであ

る。すなわち、第三段階への移行は、必ずしも行為主体の「自由」の増大を意味しない。第三段階では、「能動性」と、遍在する記号による規定との、両方の強化というパラドクスが展開するのである。記号の物質からの遊離は、記号は物質そのものではなく、ヴァーチャルな構造に観念に過ぎないことを暴露している。しかし、ヴァーチャルであるがゆえに、かえって行為主体に「時空」を超えて現象してしまう（そして、物質に自然は結局より強い働きかけを受ける）。

この事態は「学問」的視点の獲得からも理解できる。「学問」的観察者は、「時間」的「空間」的距離を超えて被観察者にまなごしを向け得る。したがって、行為主体自身に内在する「学問」的視点を顕在化すれば、行為主体は、実践に客観化する自分を、何時何処からでも客観化し得る。この客観化の客観化のため、近代の行為主体は、何時何処でも、自ら投影した「客体」を意識し、それを「能動的」に再解釈し得るのである。こうして、第三段階の行為主体は、自分自身を絶えず追い立てることが可能になる。

4 近代的疎外と資本

第三段階の記号は、行為主体を絶えず追い立て得るが、この可能性が現実的なのは、それが隠蔽している実践の根源的能動性に原因がある。「合理的」にみえる「主体」↓「客体」↓「主体」↓…の観念が強迫性を帯び、そして「能動的」に「意図されざる結果」を産出してしまうのは、この観念からの根源的能動性の把握の抜け落ちの効果なのである。すなわち、行為主体が「社会学者」となった今、「社会学」における実存的矛盾の隠蔽は、ただちに、自分自身に対する自分自身の実践の根源性の（二重の）隠蔽を意味する。「社会学」的言説により、根源的能動性に実存的矛盾は、無意識化され、この無意識が「行為の動機づけ」(motivation of action)を構成するのである（[84]:5-

6. cf. [79]: 56, 58; 六二、六三⁽⁸⁾。実践は、本質的に、自己明証ではなく自己疎外的であるが、言説化の進展により、根源的能動性の疎外は無意識化という形をとり、この、無意識化された根源的能動性が、強迫性として現れる。さらに、これは、言説化の作用として、分離した「時間」観念とも一体である。

このことを、とりあえず近代資本主義を例にして、理解しておこう。

(1) 資本の成立

第二段階では、生産は、必ずしも流通を目的として（つまり商品生産として）行われぬ。ここでは、商品として生産されたのではない余剰生産物が流通の場面に登場し、商品として貨幣で表現される。この意味で、この段階の「時空」の分節化・接合は未だ弱かったのに対し、近代資本主義では、流通と生産は不可分の過程として組織化される——「時空」の分節化・接合が強化される。このことは、第二段階の「W—G—W」（「商品—貨幣—商品」）に対し、第三段階では、これが「G—W—G」（Gは増殖した貨幣）のように「能動的」に再解釈されることに示される。この表象において貨幣は資本に転化している。すなわち、第三段階の「能動性」の成立は、「貨幣の資本への転化」に対応する。この転化の現実化は、自らの実践をさらに客観化する視点⁽⁹⁾の強化による。この視点の強化により、資本Ⅱ第三段階の記号は、もはや貨幣のもつ物質的な身体を必要とせず、何時何処でも想起可能なヴァーチャルな記号として現れる。すなわち、ここで、ヴァーチャルな記号としての貨幣の本質が明らかになるのである。

一方、「能動的」な意識は、「過去」を「未来」に向けて意識的に相対化するリニアな「時間」観念と不可分である。近代資本主義では、「時間」により科学技術と労働力が複雑な生産過程に「能動的」に組織化される。「時間」が交換可能なものとして、つまり、商品として表象され、「労働契約」が可能になることは特に重要である（[81a]: 130-131）。「時間」は、ハイデガー的にいえば名前であり（cf. [81a]: 32）、物象的観念である。マルクスの体系では、

この「時間」観念が決定的な役割を演じ、労働力の再生産に必要な「時間」(必要労働時間)よりも、労働力が労働過程で消費される「時間」の方が大きく、その差が剰余労働時間として利潤の源泉となることが明らかにされる(ここで、「時間」を名前とするハイデガーの観点と、「労働時間」の物象性を指摘するマルクスの観点が親和性を示している)。

また、実践が「時空」の無限のひろがりの中で再構築されることは、近代資本主義が本質的にグローバリゼーションへの傾向を備え、世界大の「時空」の再編が展開することを意味する(90a:63-84)。すなわち、近代の一次元としての資本主義は、ウォラーステインが強調するように、「世界資本主義経済」として成立する。この例に示されるように、近代では、第三段階の記号の作用により、ますます全世界が意識的に対象化されていく。

(2) 資本と疎外された労働

近代資本主義の労働は、資本の「能動性」に包摂された能動性の発揮であり、労働は疎外されている。この労働の疎外のメカニズムは、言説化による無意識の形成のメカニズムと全くパラレルである。すなわち、無意識は言説に強迫性を与えるが、疎外された労働は、これと全くパラレルに、資本の強迫的「能動性」として現れる。資本の「能動性」に迫り立てられるのは、「労働者」として現れる身体だけではない。「資本家」として現れる身体も、利潤の獲得を自己目的化し、競争という強制的法則に追われている。「労働者」は資本の「能動性」を必ずしも自らのものと観念しない点で「資本家」とは違っているが、第三段階の記号の作用は、「労働者」と「資本家」の両方の実践の自己疎外と等しく結合していることに変わりはないのである。²⁴

一方、近代資本主義システムでは、「能動的」労働運動——職場で「表」と「裏」を使い分ける能動性(これは第二段階の例とした)とは区別される——が発展する。²⁵ すなわち、「労働者」が自らのものと観念する「能動性」も強

化されるのである。この「労働者」の「能動性」の強化¹¹「闘争」の激化は、「G—W—G」という資本の「能動性」を阻害する。しかし、「G—W—G」という資本の「能動性」と、労働運動の「能動性」とは、第三段階の記号¹²資本をめぐる「イコール」と「ノン・イコール」の観念の「能動的」再解釈の効果である点で、同一である。つまり、労働運動の「能動性」も、資本の作用の一部である。既述のように、あらゆる言説¹³観念は「矛盾」を意味し、「対立」をはらんでいたが、第三段階のそれは、「能動的」に再解釈され、「能動的」な「対立」に転化するのである。

確かに、「イコール」と「ノン・イコール」の意識化と結合した「労働者」の「闘争」は、疎外された労働の抗議の表明——実践に内在する矛盾、イコールとノンイコールの表明——である。しかし、「ラディカル」な観点からいえば、疎外された労働がこのようにしか観念されない（矛盾が外部に表れた「対立」としてしか観念されない）ことこそ問題である。これに対して、「対立」の観念¹⁴言説を相対化することこそ「ラディカル」であり、疎外された労働の立場を回復することに他ならない（これなしには、たとえ「対立」により「資本家」を打倒しても、マルクスのいう人類の「本史」はまだ先のことである）。

はじめに述べたように、福祉国家（これは労働者階級の「能動性」の成果である）は今日危機の中にある。福祉国家等をもたらした反省的自己規制は、「造りだされた不確実性」や「造りだされたリスク」に直面している。さらに、労働者階級の「能動性」は、グローバルゼーションという文脈では、その国の産業の競争力に否定的影響を与え、その国の産業的衰退や伝統的工業地帯の地域解体というローカルな変容を引き起こし得る（cf. [90a]: 64-65; 八五—八六）²⁰。ギデンスは、このことを指摘することにより、近代の「能動性」の成果を認めつつも、「能動性」の意義を批判的に相対化する。資本のもたらす「能動性」による「対立」も、福祉国家の危機や伝統的工業地帯の衰退等の「造りだされた不確実性」も、等しく疎外された実践の帰結であり、「能動性」と「意図されざる結果」との

「矛盾」の先鋭化を示しているのである。

この見方によれば、資本の問題性と、福祉国家の危機や労働者階級の解体の問題は、近代の問題である点で同一である——すなわち、一方が近代ないし「モダン」の問題であり、他方が「ポスト・モダン」の問題であるといった違いがあるのではない——ことに注意しよう。「能動性」の土台に疎外された実践を見いだす観点からすれば、両者は、等しく、実践の非自己明証性の近代的表現に他ならない。ギデンズにとっては、このような観点こそ、「ラディカル」なのである。

(3) 小括——「ジャガノート」としての近代

ここまで論じてきた近代の性格を、ギデンズは、ヒンズー教のクリシュナ神の像を頂いた、巨大な車輪をもつ「ジャガノート」という山車に譬えている。それに乗ることは、まったく不愉快で報いがないというわけではなく、しばしば気分を高揚させ、明るい希望をもたらす。しかし、ジャガノートの進行の方向や速さを完全にコントロールすることはできない。ジャガノートはある程度は運転可能であるが、われわれのコントロールが効かなくなる恐れがあり、ばらばらに解体してしまうかも知れない。高揚感の一方で、完全な安心を感じることとはできない ([90a]: 139; 一七三; cf. [91]: 28)。ジャガノートと近代が類比されるのは、ジャガノートは「能動的」に人の力で動かされ、近代の社会システムは「能動的」実践により構成されるという、それらの基本的性質にもかかわらず、両者が部分的にのみコントロール可能な点にある。つまり、ジャガノートという比喻は、第三段階の記号がもたらす「能動性」による社会システムの産出Ⅱ「意図されざる結果」の産出という近代のメカニズムの核心を指示しているのである。「能動的」に「意図されざる結果」が産出され、「造りだされた不確実性」があらわになる今日の時代は、ギデンズにとって「ポスト・モダン」ではない。「造りだされた不確実性」と「造りだされたリスク」の時代は、近代の延

長である。ギデンズはこれを「高度近代性」(high modernity) または「徹底化された近代性」(radicalized modernity)の時代という ([90a]: 149-150, 163; 一八五—一八七、二〇二、[91]: 4)。この観点によれば、「ポスト・モダン」の議論は、「モダン」の性格である「不確実性」や「不安」といった現象面をとらえるに止まり、そのメカニズム——マルクスが既に前世紀に明らかにした——を「ラディカル」に解明し得ていないことになる。「ポスト・モダン」という認識は、「モダン」の「ラディカル」な解明を欠くゆえに成り立つのである。

ここまで、マルクスの解明した資本の問題性と、近代の記号のシステムⅡ「抽象的システム」の問題性とを同列に把握することを通じ、ギデンズ近代論の性格を明らかにしてきたが、このことは、ギデンズが、マルクスの資本についての議論を、近代の問題性の一次元として限定すると同時に、記号一般の問題性を示す議論として拡張してもいることを意味する。また、このマルクスの拡張は、生態系の危機やジェンダーの問題を含む、今日的な諸問題を「ポスト・モダン」等の議論によらずに解明すべきことも示唆している。⁽²⁶⁾ 次章の課題のひとつは、これら今日的な諸問題の、近代的問題の諸次元としての位置づけを明らかにしつつ、ここまでたどってきたギデンズの議論の道筋を、「国家」と「政治」の概念に即して展開することに他ならない。

第三段階の記号の作用としてとらえられた近代の問題性は、そのまま、「学問」的实践の問題性ともなった。近代の反省性は、「学問」的には、啓蒙思想を産み出す一方、啓蒙思想の期待を裏切るものである。すなわち、啓蒙思想は、その方法的懐疑により伝統的ドグマを超克するが、この懐疑は自らの知の確実性をも侵食してしまう ([91]: 2)。この理論上の問題は、反省的自己規制が「造りだされた不確実性」を引き起こすという実践的問題と全くパラルレルな性格をもち、安定的基盤のない「流砂の上に建てられた科学」(ポパー)という譬えは、科学的探究と日常生活

活全体とに同様には当てはまるのである (〔94b〕: 87)。

この近代の問題性の根源には、土台にあつて「不安」をかき立てる、無意識化された実践固有の能動性があつた。この無意識は、排除しようとしても排除しきれない、感情的反応を呼び起こす陰影を近代の言説に与えずにおかない。このため近代の言説は、実践的には、強迫性を帯び、感情的エネルギーを動員し得る。他方、努めて「冷静」を保ち、実践の過程に相対する「学問」的言説の理論的態度も、二重に疎外されている点において、感情を露にし「能動的」に「対立」する実践的態度と変わるところはない。近代の「学問」的言説の問題性は、努めて「客観性」を確保しようとする「学問」的言説の動揺として現れたが(第一章)、このような「学問」的態度は、むしろ、強迫性に駆られる実践的態度の、理論的な鏡なのである。したがつて、福祉国家の危機や労働者階級の解体を造りだした「能動性」には勿論、この現象を「客観的」にとらえようとする「学問」的实践自体にも、近代の問題性は等しく内在していることになる。

「高度近代性」の時代とは、この問題性がますます明らかになっていく時代に他ならない。次章では、このことについて、引き続き、実践と「学問」的实践に内在する問題の基本的同一性という観点から展開したい。言説は、根源的能動性を二重に隠蔽したにもかかわらず——そしてそれ故に無意識化された根源的能動性は、いまや何時何処でも、実践の文脈でも、「学問」的实践の文脈でも、「不確実性」や「不安」として、近代人の表象に陰影を投げかけてくる。したがつて、実践と「学問」的实践との間に本質的区別はないならば、「政治学」の営みにおいて使用される言説にも、等しくこの陰影が映しだされているはずである。

三 注

(1) 少し謎めいたギデنزの(ハイデガーに従った)言明——「時間が単に、空間的存在と偶有的に結合した今の連続であるなら、時間が後戻りしない理由を理解できない。時間が『可能なものの生成』だとすれば、時間の『前進性』が明確となる」((79): 44)——も、実践に内在する時間と、「 $A \rightarrow B \rightarrow C \dots$ 」という「時間」の観念とを区別するものである。「時間」を「空間的存在と偶有的に結合」するのは、人間の認識の作用である。われわれは、 A という事象と結合した「今」、 B という事象と結合した「今」、 C という事象と結合した「今」、等の接合の連続として「時間」を認識する。しかし「 $A \rightarrow B \rightarrow C \dots$ 」は表象にすぎず、生成する時間の前進性ではない。ギデنزの批判する機能主義による「時間」と通時態との同一視((79): 198: 二二九)とは、機能主義では「時間」が「 $A \rightarrow B \rightarrow C \dots$ 」のように認識されている——実践と観念との同一視——ということに他ならない。

他方、機能主義的社会学は、「時間」を無視し、「時間」をあつかう歴史学と棲み分けてもいる((84): 360-361)。この場合は、「時間のないスナップ写真」を撮るように社会システムの再生産をとらえること——「構造的決定」をとらえること——が課題となり(共時的分析)、こうして得られた言説が、現実の「画」とみなされる。ここでも実践と言説(「画」)は同化されている(第一章、一二)。結局、「 $A \rightarrow B \rightarrow C \dots$ 」という「時間」観念も、「時間」の無視も、実践と言説との同化 \parallel 言語「道具」論と結合している——だから、言語「道具」論をとるひとりの社会学者のなかに、「時間」の無視と、通時態と共時態との使い分けとが同居するのは、全く不思議ではない(cf. (84): 228)。なお、「時間」の無視は、繰り返しされる「時間」 \parallel 「可逆的時間」のイメージに転化することもある。先の「時間のないスナップ写真」とは、「私有財産 \rightarrow 貨幣 \rightarrow 教育上の有利さ \rightarrow 職業上の地位」といった因果のループのことであるが、ここでは、「時間」は、因果のループに沿った循環的進行としてイメージされているともいえる——共時的分析は、時間の無視のみならず、「可逆的時間」のイメージももたらし得る。こうして、共時態と通時態の分離は、「可逆的時間」と「不可逆的時間」との対立としても現れ得るのである。このアポリアも、やはり実践と言説の同一視から生まれている。

因果のループから「時間」の観念を得ることは、「ニワトリ」と「卵」のパラドクスにとらわれるのと同じである。パラドクスは、「ニワトリ」と「卵」との言説的な差異から「時間」の流れをとらえると、どちらかを先にして「時間」の「容器」に入れざるを得ないが、どちらを先にすればよいか分からない、ということから生じている。しかし、存在しているのは、「ニワトリ」と「卵」という観念ではなく、絶えざるニワトリの発生である。この絶えざる生成(と消滅)の過程にあるニワトリが、別種の生物から区別されて「ニワトリ」と名前がつけられる時、「ニワトリ」とその「卵」は、どちらかが先にはなく、同時に「生まれる」——ただし、同時に「生まれた」のは「ニワトリ」と「卵」という観念である。これに関連し、マルクスが、資本の形態Ⅱ「 $G \rightarrow W \rightarrow G$ 」について、「父なる神」(G)と「子なる神」(G)とは「同じ年齢」であるとしていることも指摘しておこう(第二分冊、二六四)。「 $G \rightarrow W \rightarrow G$ 」は観念(Ⅱ形態)であるから、「 $G \rightarrow W \rightarrow G$ 」の「 G 」と「 G 」は、この観念の成立時に同時に「生まれた」のである。これに関連して、さらに注(7)参照。

- (2) 物質について繰り返しておけば、ギデンズは、観念と区別され、何らかの意味で客観的に存在している物質を認めないのではない。貨幣や、都市、工場等は物質的な身体を有する。しかし、その物質性は、それが実践的に対象化された時にのみ社会システムを構成する契機となる。貨幣であれ、さまざまな建造物や文書であれ、それを対象化するための知識Ⅱ身体化された構造が失われれば——簡単にいえば、使い方を忘れてしまえば——それらの物質はただちに社会を形成していく契機であることを止める。身体化された知識により対象化された時にのみ、それらは「貨幣」や「場」として現象し、実践を形成するのである(前稿(一)二一八頁)。この時、物質は、権力の「容器」としての役割を果たしている(本章、二の2)。

- (3) ギデンズ自身が「文脈」について循環論法的に述べている箇所として〔79〕:3384:九〇。「文脈」と「時空」は、同義と考えてよい。

ギデンズにおいて「権力」と「時間・空間」とが循環論法を成していることの指摘として、貝沼洵「A・ギデンズのモダニティ—論と情報、空間、そして権力」名古屋大学文学部研究論集(哲学)一一七、一九九三年、七九—八〇頁。既述のように、

実践Ⅱ行為は権力性を内在させており、行為論と権力論はイコールであるから（前稿（一）二二二、（二）二四九—二五〇頁）、権力と「時空」との循環論法は、実践と「時空」の自己言及性に他ならず、構造の一重性の表現そのものである。したがって、この循環論法はギデンズにとって当然のものである。

- (4) 以上のようにギデンズの立場を敷衍するには、大澤氏の時間についての所論が参考になる（『行為の代数学』一四〇—一五九頁）。ギデンズ自身は、時空に関する哲学的問題を解決したと主張しているわけではないが（(90c): 299）、現代物理学の時間概念が社会理論の時間概念に影響を与えてきたこと、両者が両立可能な部分を有することを示唆している（(81a): 3233）。先の時間が後戻りしない理由についての議論（注(1)）も、物理学的な時間が念頭にあると解せる。ここでわれわれは、この時間についての議論を物理学的な意味で承認する必要はない。社会理論としては、実践の能動性に社会システムを構成する時空の生成をみるということであり、時空の実践がやめば社会システムも時空的に存在することをやめるということに過ぎない。ただし、大澤氏は、時間についての自らの説明を、物理学的な時間の説明と積極的に接続しようとしている（『行為の代数学』一五九—一六六頁）。

なお、ギデンズは、ハイデガーの時間論・存在論が、「範列的次元」（構造の非時空性をさす——岡田）を欠く点を批判している（(90): 244, 五九）。これは、ハイデガーが参照性の基盤としての言語（Ⅱギデンズの構造概念）というアイディアを有するにもかかわらず（前稿（一）二二六頁）、ハイデガーにおいては、構造Ⅱ言語的知識の使用、すなわち物神的構造の現象と、時空Ⅱ存在の生成の関連が明確化されていないという趣旨だと考える。この関連を明確化してこそ、生成としての時間と「 $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow \dots$ 」という「時間」観念との区別も明確化し、この観念の実体化を防ぐことができる。

以上、ギデンズの時空論をみてきたが、ここで時空論と構造Ⅱ「相互知識」概念とを結びつけ、やや長い補足をしておきたい。マルクスが「はじめに行為ありき」（一四八）というのは、言説や観念を所与のカテゴリとして扱う「ブルジョア的」観点を批判するためであった。他方、行為の媒体となるのは、言語的知識Ⅱ「相互知識」Ⅱ「内的」構造であるが（前稿（一）二〇七—二

一三頁。これを指して「言葉」というなら、「はじめに言葉ありき」という命題の方が妥当する)、ギデンズは、この「相互知識」を、特定の言語についての知識としていた(前稿(二二六—二七頁)。これを狭義の構造Ⅱ「相互知識」としておこう。これに対し、始源における言葉の成立や、異なる言語の間のコミュニケーションの問題に視野をひろげる場合、広義の構造Ⅱ「相互知識」が問題になる。広義の「相互知識」とは、石Aを対象化した時のアウストラロピテクスと、石Bを対象化した時のアウストラロピテクスとに共通するなにかであり、異なる言語を使用する人々に共通するなにかである。この共通するなにかⅡ広義の「相互知識」なしに、どのような言語も成立しないし、異なる言語間のコミュニケーションや翻訳は成り立たない。

ギデンズは、広義の構造を明確に論じていないが、ハイデガーの「無からの存在の生成」という命題に言及し、ハイデガーの立場を、「時間は存在と非存在の絶えざる相互作用のなかに現れる」と説明する時(81a;31, 84;34)、自らの構造概念と、ハイデガーの「非存在」の「無」を重ね合わせ、実質的に広義の構造Ⅱ「相互知識」について語っている。「無」とは、存在Ⅱ実践がそこから発生し回帰する所であり、この発生と回帰の振動の過程が、時空Ⅱ実践Ⅱ存在の産出である。この「無」こそ、すべての存在の生成を可能にしているという意味で、真に「はじめ」にあった「相互知識」である。しかし、時間の産出の前提であるという点で、時間を超えたこの「無」は、もはや単なる「はじめ」ではないし、また、「はじめにある」というのも語弊がある(「無」であるから)。

このような広義の「相互知識」の承認は、自己のうちに含まれる「真に無限なもの」というヘーゲルの「理性の此岸性」の立場(第一章、三の注④)や、ひとつの文化圏の中の「意味の枠」の媒介と、異なる文化・パラダイム間の媒介との間に本質的区別を認めない立場(同、注③)と整合する。また、後述のような世界大の「時空」の再構成を論じる際にも、狭義の「相互知識」を超えた普遍的な「相互知識」が前提にならざるを得ない(以上については、ギデンズの「相互知識」の説明(76;88-91;二四—二九)と、より厳密な大澤氏の『共有された知識』のパラドクス』についての説明(大澤真幸『意味と他者性』勁草書房、一九九四年、二七九—二八五頁、同『性愛と資本主義』青土社、一九九六年、一九—二三頁)も参照)。

広義と狭義の「相互知識」について語ることは、構造概念の問題点を示すのではなく、むしろ、以下で述べる如く、「構造の二重性」論の帰結するところである。

アウストロロピテクスや異文化圏の行為のみならず、動物の行為さえも「子ネコが親ネコに甘えている」などと日本語で解釈できるのは、単に、広義の「相互知識」のゆえではなく、われわれが特定の言語（日本語）の知識を有するからである。逆にいえば、「子ネコが親ネコに甘えている」と言う時、広義の「相互知識」の現前は、日本語の知識の作用として現れざるを得ない。広義の「相互知識」の作用は、狭義の「相互知識」の作用としてのみ把握可能であり、かつ、社会システムを構成する意味Ⅱ実践を産出する。ギデنزが、社会システムを構成する実践を狭義の「相互知識」の作用から説明することには、このような根拠がある。

広義の「相互知識」の現前は、より個人的な狭義の「相互知識」として現れるというのは、「相互知識」が当該文脈に固有の変奏として現前するという「構造の二重性」（前稿（一）二二—二四頁）と実質的に同じことを意味する。広義と狭義の「相互知識」の対立は「構造の二重性」の現れなのである。ただし、ここでの「構造の二重性」の作用は、いわば二重化されている。つまり、実践は、根源的には広義の「相互知識」の変奏だが、それが具体的にシステムを構成する時、狭義の「相互知識」の変奏として現れる。すなわち、変奏が二重である。この二重化の作用は、特定の言語による言説的な解釈が問題となる時——「学問」的観察者の視点が形成される時——特に明確になり、今みた広義と狭義の「相互知識」の問題のような形で現れてくるのである。

このことは、「進化主義」をめぐる展開される後の重要な論点に関わっていく。

- (5) ギデنزとは別のところでは実存的問題を四つに分類して「実存的矛盾」をその一つとして位置づけている（[91]:47-55）。これについては後述。

- (6) 「フォルト・ライン」とは自己疎外を展開させる観念そのものであり、逆にいえば、観念をつくりだすこと自体が逆説的事態

を展開させる。このことは「再生産」と「変動」という観念についてもいえる。あらゆる実践は変奏的であるが、「再生産」と「変動」を「変動」の程度により区別する場合、境界が引かれる「変動」の程度は、行為主体ないし「学問」的観察者の関心、視点により多様である。つまり、「再生産」と「変動」は、行為主体ないし「学問」的観察者がつけた名前にすぎず、変奏としての実践の本質をとらえるには、「再生産」イコール「変動」といわざるを得ない。これとまったく同様に、「対立」と「共同」という観念を用いて実践の本質に迫ろうとすれば、「対立」イコール「共同」という逆説に訴えざるを得ないし、行為主体自身も自らの実践をどちらにも観念し得るのである。

さらに、実践を「機能Fの認知」というのも(本章、二の1)同様である。反省的自己規制のイメージ——ここでは「認識」↓「実践」↓「認識」↓……としておく——の成立により、「認知」ないし「認識」と、「実践」は、異なるものとして現れるが(この二つは、両者の言説的差異のために、「認識」の後で「実践」があると観念される)、ある「認識」に基づきある「実践」をなす場合、両者をどの様に区切るべきであろうか。行為主体の身体が一ミリ動いた時であろうか。それとも〇・一ミリ動いた時であろうか。どのように区切るにしろ、こうして区切られた「認識」や「実践」も、区切った者が造りだした観念に他ならない。やはり、実践の本質をとらえるには、「認識」イコール「実践」といわざるを得ない(これは、第一章、四の論点とも関連)。ブルデューのハビトゥス概念が、多くの「二者択一」を「超克」するのと同じ事情による(『実践感覚』一八七頁)。これはハビトゥス概念の曖昧模糊とした性格を示すのではなく、「どうにも把握のしようのないもの」を観念的にとらえようとして「二者択一」の問題をつくり出した方が倒錯に陥っているのである。

(7) ギデンズは、「史的唯物論」批判の文脈で、「進化的主義」の特質として、①社会の発展のレベルを物質的環境を統制する能力——生産力の発展——により測ること、②社会の発展を「適応」の過程とみなすことを挙げる(8a) 82。機能主義批判の文脈においては、(8b) 229-233)。これらが含意する問題点とは、社会の変化を、単線的なモデルや、人間の人格的発達と相似的なモデルに押し込め——これは言語「道具」論そのものである——、このモデルに沿った発展に規範的含意を与えてしまうこと、さら

に、時間の経過と変化とを同一視してしまうことである(84:239-243)。すなわち、ギデンズの「進化主義」批判の焦点は(本文で指摘した齟齬が示すように彼の叙述は明快とはいえないが)、またも、「学問」的観察者の視点をとることで「進化」の言説や図式をつくり、それを実体化すること——言説と実践を同一視すること——にある。このギデンズの立場は、「理性」が世界史を支配しているように見えてしまうヘーゲルの立場を批判し、これに対し、マルクスと共に、生きた人間の実践を対置する(81a:73-74)ことにも示されている(したがって、本文の議論はギデンズに対する批判ではなく明確化である)。

ただし、ギデンズは、マルクスが「進化主義」から完全に断絶していると考えていない。『史的唯物論の今日的批判』(文獻[81a])では、マルクス自身から「進化主義」批判を引き出しつつも(ギデンズは、アジア的、古代的、さらに封建的生産様式を「進化」の過程ととらえず、これらを一括して近代の資本主義に対置するアイデアを、マルクスの『フォルメン』から引き出す——これについてはすぐ後で触れる)、これにより、マルクスの「進化主義」的側面を批判するという手法を採る——「マルクス自身に対してマルクスが使用できる」(81a:2, 76-81)。

(8) 第一章、1の注(7)参照。

(9) やはり言説化Ⅱ「学問」の実践から帰結した二つの「相互知識」の問題(注(4))は、「相互知識」は変奏として現前するという「構造の二重性」の効果であるのに対し、今度は、実践は所与の如きものを現象させるという「構造の二重性」の効果である。いずれも、実践をさらに対象化する言説化Ⅱ「学問」の実践が、「構造の二重性」の作用を二重化させている。なお、以下で、第二段階に続き近代に相当する第三段階が論じられるが、「段階」という言説化から「進化主義」が実体化される危険がある。「段階」という言説は、叙述の便宜のための用語Ⅱ図式に過ぎず、「段階」が図式であることを忘れたり、さらに、図式であることを自覚していても——ヘーゲルが「理性」についてそうしたように——図式の展開イコール歴史の展開とすれば、結局は決定論に陥ることに注意すべきである(81a:73-74)。

(10) 図1は、有井行夫氏から借用し(『マルクスの社会システム理論』一五四頁)、その構成要素をギデンズの用語で言い換え、社

会システムの段階的変容を示すものとしてとらえ直したものである。なお、④については後述。

- (11) パーソンスの「役割」概念は——彼自身はもともと「役割」概念により行為主体の能動性の理論化を目指したにもかかわらず——「所与」であるという性格が強い。機能主義理論では、「役割」を所与とすることにより、行為主体の能動性は「役割」を果たすことに還元され、これらの「役割」の集合が社会システムを形成すると考えられる（(79):116;117）。ギデンズは、これを「制度のクラスター化」という（[81a]:45,46 cf. [79]:97;105）。ギデンズは、このクラスター化された「役割」の所与性を相対化し、それが根源的な能動性により産出されることを強調する。機能主義はこの根源的なレベルでの行為主体の自由を見落す。すなわち、①を没却する。この問題点は、「自由演技」の余地の承認し、「役割」が対立しあう多様なものとしても、正されるものではない。行為主体は、常に、かつ、本質的に、根源的な能動性、創造性を有することの理解が肝心である。この「役割」概念批判は、「容器」や名前としての「時空」の批判的相対化とまったく同様のものである。社会システムの構成を「役割」の分化ととらえるにせよ、「時空」の分節化ととらえるにせよ、「時空」や「役割」は根源的な能動性により対象化された観念であることの見落しが問題である。

なお、「時間地理学」（T・ヘーゲルシュトランド）の life path 等の概念も、このような「容器」ないし名前であり、それを産出する根源的な能動性が忘れられているという観点から批判される（(84):116-117）。

- (12) 本文でも触れたが、アウストラロピテクスによる「時空」の萌芽的形成は、「役割」の萌芽的形成でもある。遠隔化・領域化は、行為主体に即していえば「役割」の分化であり、外界の現象に即していえば「時空」の分化なのである。なお、前注(11)も参照。

- (13) ギデンズ近代論の概括的介绍として、田口富久治『近代の今日的位相』平凡社、一九九四年、同『解放と自己実現の政治学』近代文藝社、一九九五年。

- (14) この「能動性」の観念は①の意識化ではない。ここで言説のトリックが作用している。言説を前提にすれば、①の契機は把握

できない（なぜなら、言説や観念を根源的に産出するのが①の契機だから）。すなわち、ここで進行した意識化は、「客体」観念を前提とし、これを再解釈し、それに規定された「役割」を演じるという、③の契機の自覚化たらざるを得ない。

- (15) 有井行夫氏は、①を「疎外1」、③を「疎外2」と呼ぶ（『マルクスの社会システム理論』一五四頁）。また大澤真幸氏は、③を「第三者の審級の再投射」という（『性愛と資本主義』二〇〇—二〇五頁、『身体の比較社会学・I』二七五—二七六頁）。

- (16) ただし、原初の実践について言説化が可能なのは、原初の実践にも分離した「時間」「空間」の要素が萌芽的に内在するからである。いかなる実践にも①と④の全契機があることを忘れてはならない。

- (17) 二重の自己疎外Ⅱ言説化が「時間」観念を含意することは、「ニワトリ」と「卵」のパラドクス（注①）にも現れている。すなわち、「ニワトリ」と「卵」の言説化と同時に、「ニワトリ」→「卵」→…という「時間」観念が展開し得るのである。この展開は「ニワトリ」と「卵」という言説を強く対自化すること——自己疎外の二重化の強化——により現実化する。同様に、次に論じるように、貨幣も、強く対自化され自己疎外の二重化を強めるにつれ、「時間」的観念を含み、かつ「未来を植民地化」(e.g., [9]: 125) しようとする「G—W—G」という観念を成立させていく。このようにして機能主義的社会学における「時間」観念は成立するのである。

注①でみた因果のループに示される再生産の定式化や、反省的自己規制に対応する「G—W—G」も、これ自体では社会科学の説明とはならず、むしろ説明されるべき、二重に疎外された観念に過ぎない（これに関連して次の機能主義批判参照。[89]: 261, [84]: 293-297）。

- (18) ただし、「専門家」(expert) は、必ずしも「専門的職業人」(professional) ではなく、それが使用される文脈による相対的な用語であり、ある人が他の普通の人がもたない特定の技能や知識をもつと主張できる場合、その人はその場合において「専門家」である（[94b]: 84）。

- (19) 『身体の比較社会学・I』二七七頁。これに関連して、ウェーバーの論じたプロテスタンティズムの倫理の資本主義の精神へ

の転換が、記号の抽象化の表現であることについては、『性愛と資本主義』一五五―二二二頁。ただし、大澤氏のポイントは、ウェーバーのとらえた「歴史の大きな変動」を「抽象身体」の反復的な産出に読み替えることにある。ギデンズも、これとパラレルに、ビュリタニズムが近代の「離陸」に果たした役割を認めつつ、これを、フロイト的「抑圧」と結合することに反対し、果てのない反省的自己規制を産出するものとして把握し直す(91: 153-155)。

- (20) ギデンズが、無意識的なものは意識的なものとの関係においてのみ探究され得る((79): 58, 63)というのは、今述べた、隠蔽された無意識と「社会学」的言説との本質的連関を指摘するものである。また、社会理論にとり無意識概念が本質的である((79): 58, 63)というのは、隠蔽され、無意識化された根源的能動性の観点から「社会学」を批判する「構造の二重性」論の中心的テーマの言い換えに他ならない。また、ギデンズは、実践的意識(practical consciousness)と、言説化された意識＝言説的意識(discursive consciousness)と、無意識(unconsciousness)の三つが意識の三つの層をなすとするが((84): 7, 376, (79): 2, 56-58; 二、六一―六三)、無意識から次第に実践的意識、言説的意識が成立してくるのではなく、まず、実践的意識が記号を産出し、それが言説化されることにより、言説的意識と無意識が分化し、この結果、根源的能動性の領域が無意識化されと考えるべきである(c.f. (86): 557)。

- (21) 貨幣の資本への転化については、有井氏の所論参照(『マルクスの社会システム理論』一四八―一五八、一三〇―一三四、二四八―二五三頁。この理解がいわゆる「転化論争」に対してもつ含意については、同前二五三―二五五頁)。

- (22) 「労働者」と「資本家」等の「階級」について語るべきことは多いが(文献として特に、(73), (81a), (81b))、ここでは、構造化理論の次の基本的立場のみを確認しておく。システムを構成するのは疎外された実践のみであり、「資本家」や「労働者」は、「役割」の一種であり観念に過ぎない。両者の構成する「階級構造」も、両者と同値の観念である。これらの観念が行為主体自身により言説的に認識されると、彼らの「能動性」は強化され得る。しかし、「労働者」は勿論、「資本家」として観念される行為主体の実践も、同様に疎外されている。「資本家」や「労働者」のみならず「能動性」も、能動性を疎外し、かつ、疎外

された能動性により産出されている観念なのである。なお、彼らの経済的、社会的地位にかかわる財産や居住地、さらに「役割」を担う人間の身体は、勿論物質的な性質を有するが、これらは、「資本家」、「労働者」、「階級構造」等の記号の「容器」に他ならない（注②参照）。

有井氏の、マルクスに即した「資本家」論（有井行夫『株式会社の正当性と所有理論』青木書店、一九九一年、特に第一章）も、存在するのは疎外された労働のみという同一の観点を示している。有井氏は、いわゆる「貨幣資本家」も「機能資本家」も、資本に対して私的所有という性格を与える点にのみ存在意義があり、このため、労働に対し生産手段が「*means*」な所有として対立し「資本関係」が成立することを指摘している（同前八五―九二頁）。「資本家」は、私的所有という性格を与える点にのみ存在意義があるとは、「資本家」が観念に過ぎないというのと実質的に同じである。「資本関係」はこれと同値の観念であり、これらが自己疎外的労働を媒介する。「労働者」は勿論、「機能資本家」（いわゆる「管理者」を含む）として現れる身体も、行っていることは、これらの観念で媒介された疎外された労働に他ならない。「貨幣資本家」として現れる身体は、生産活動という狭い意味での労働はしていない。しかし、その身体も「資本家」や「資本関係」という疎外的観念を有していることに変わりなく、本稿のように、疎外的観念を産出する認識も実践とすれば、彼らも実践的に疎外されているといえる。すなわち、すべての行為主体の実践が疎外されているのである。

なお、「資本家」が、資本主義の発展につれ余分なものになるというのは、それが観念に過ぎないことがますます明らかになり、資本は、疎外された実践の産出に際し、「貨幣の物質的身体はおろか」「資本家」として観念される身体も、必要としなくなるということである。

(23) 近代において、それ以前の段階の特徴を示す実践がなくなるわけでは全くない。また、近代の社会システムの再生産の説明でも、再生産としてそれをとらえる限り、第二段階の概念は有用である。

(24) 第二段階の、表裏一体である遠隔化と領域化は、「支配の弁証法」を表現していたが、グローバリゼーションも、ローカルな

変容と一体の「弁証法的過程」である([90a]: 64; 八五、[91]: 21-22)。この「グローバル化」とローカルな変容は、第三段階における反省的自己規制と結合した遠隔化と範域化の一種と考えてよい。なお、念をおしておけば、遠隔化と範域化の現象自体は機能主義的理論でも把握できる(本章、二の4)。問題は、これを土台にある疎外された実践の観点から批判的に相対化することにある。

- (25) ギデンズは、ウェーバー、マルクス、ハーバーマスの近代像に対置する形で、ジャガノートの比喩を提起しているが、実は奇しくも、マルクスは既に「資本論」において、資本の運動の比喩としてジャガノートに言及している(第二分冊、四八五)。なお、ギデンズは、別の所で、近代の「ある程度は運転可能」な側面が強い時期を「単純な近代化」(simple modernization)と呼び、「コントロールが効かなくなる恐れ」が強くなる時期を「反省的近代化」(reflexive modernization)と呼んでいる([94a]: 42, 80-87)。

- (26) 本稿では実践一般の疎外を明らかにしてきたが、ギデンズは、これを労働のみに焦点をあてるマルクスの批判的相対化から引き出すのに対し、有井行夫氏は、実質的に同じことをマルクスから直接引き出す。この両者の同一性と違いは、今日の問題のひとつである「エコロジカルな荒廃・惨禍」([90a]: 171; 一一二)の問題把握によく表れている。

有井氏は、自然と人間の対立の「有機的統一」の実現過程を「生産力の発展」とし、これを「疎外された生産力」の発展と区別する——資本主義的生産力の拡大(「自然にたいする暴力的な支配力の発展」)は、自然と人間の対立の「有機的統一」としての「生産力の発展」ではないのであり、「資本のもとでは「疎外された生産力」の外被をとって生産力の飛躍的發展が実現されていると考えなければならない」。このような立場から、「疎外された生産力」の増大を「独占資本主義の生命力」とする見方や、逆に、資本主義では「疎外された生産力」も増大しえないとしたり、さらに、社会主義が「疎外された生産力」の増大において資本主義と競争しそれを凌駕できるとの見方は、マルクス生産力概念の誤解に基づく幻想として厳しく批判される(「マルクスの社会システム理論」一七八—一七九頁)。

この有井氏の立場と、ギデンズの、能動性の疎外により「造りだされた不確実性」や「造りだされたリスク」が帰結するという立場が完全な重なりをみせる。すなわち、有井氏のいう資本の「疎外された生産力」は、ギデンズ的には「能動性」により疎外された能動性であり、「疎外された生産力」による「自然にたいする暴力的支配の発展」は、近代の「能動性」により「造りだされた」、「重大な帰結をもたらすリスク」の一つ——「エコロジカルな荒廃・惨禍」——が帰結することに他ならない。有井氏は、「資本の生産力」と、生産力を区別し、生産力をギデンズ実践概念と同レベルの概念として理解して、エコロジカルな観点をマルクスから直接に引き出すのに対し、ギデンズは、マルクス生産力概念の理解では、有井氏が批判するような理解にとどまるが ([81a]: 89, [91]: 165)、マルクスの主客の弁証法——この理解でギデンズと有井氏は一致する——を構造化理論として引き継ぎ、これを労働ではなく実践一般に即して展開することにより、有井氏と共通の立場に達する。この両者の立場は、マルクスの主客の弁証法は、本来的に、「ラディカル」なエコロジーの理論であることを示している。

なお、ギデンズは、「無限の豊かさ」によりポスト稀少性システム（「共產主義」）が実現するという見方を、マルクス自身ではなく、一部のマルクス解釈者のものとして批判的に言及する場合もある ([94b]: 194-195)。